

日本現代文壇
全集
105

現代名作選
(一)

日本現代文學全集
105

現代名作選 (一)

講談社

日本現代文學全集

105

現代名作選(-)

編 集

伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



初版 第1刷

昭和44年4月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著 者
矢 崎 嵯 峨 の 屋
江 見 水 蔭
白 柳 秀 湖
長 田 幹 彦
平 出 修
ほか

装 幀 蟹 江 征 治

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株式會社 講 談 社

印 刷 大日本印刷株式會社
製 本 島田製本株式會社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵 便 番 號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振 替 東 京 8-3930

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします

Printed in Japan

0395-107056-2253 (1)

(文1)

現代名作選(一) 目次

卷頭寫眞

長田 幹 彦
零 落……………六
平 出 修

矢崎嵯峨の屋

相馬 泰 三

初 戀……………七

六 月……………七

江見 水 蔭

中村 星 湖

女房殺し……………一九

女のなか……………一〇七

白柳 秀 湖

宮嶋 資 夫

驛夫日記……………二五

坑 夫……………一三〇

吉田 絃二郎

島の秋……………一五

宮地 嘉六

煤煙の臭ひ……………一六

中戸川 吉二

イボタの蟲……………一八

武林無想庵

ピルロニストのやうに……………一五

細田 民樹

多忙な初年兵……………二〇

新井 紀一

怒れる高村軍曹……………二七

小島 勲

地平に現れるもの……………二五

松永 延造

ラ氏の笛……………二三

龍膽寺 雄

放浪時代……………二四

中村 正常

アミコ・テミコ・チミコ……………二五

佐左木俊郎

熊の出る開墾地……………三六

藤澤 桓夫

傷だらけの歌……………三六

深田 久彌

あすならう……………三七

和田 傳

村の次男……………三六

十和田 操

判任官の子……………三四

鶴田 知也

コシャマイン記……………三二

石上玄一郎

クラーク氏の機械……………三七

岡田 三郎

伸六行狀記……………三三

加能作次郎

乳の匂ひ……………三六

芝木 好子

青果の市……………三五

作品解説・作家入門……………	小田切秀雄	三七
年譜……………		四三
参考文献……………		四六

現代名作選
(一)

矢崎嵯峨の舍

初 戀

嗚呼思ひ出せばもウ五十年の昔となつた。見なざる通り今こそ頭に雪を戴き、額に此様な波を寄せ、貌の光澤も失せ、肉も落ち、力も抜け、聲もしはがれた梅干老爺であるが、是でも一度は若い時もあったので、人生行路の踏始若盛の時分には種々面白い事もあつたので、其中で初めて慕はしいと思ふ人の出来たのは、左様さ、丁度十四の春であつたが、あれが多分初恋とでも謂ふのであらうか、まア其事を話すとしてよう。

丁度時は四月の半、ある夜母が自分と姉に向つて言ふには、今度清水の叔父様がお雪さんを連れて宅へ泊りにいらつしやるが、お雪さんは江戸育で、此處等邊の田舎者とは違ひ、起居もしとやかで、挨拶も沈着いた様子の宜い子だから、其方たちも無作法な事をして不束者、田舎者と笑はれぬ様によく氣を着けるがよいと言はれた。其から又其お雪といふ娘が如何様に心立がやさしく、氣立がすなほで、如何様に姿が風流で眉目容が美しからうと賞めちぎつて話され

た。幼少のうちは何事も物珍らしく思はれるが、殊に草深い田舎に住んで居ると、見る物も聞く物も少ない故一寸した事も大層面白く思はれる者で、母が彼様に賞めちぎる娘、たをやかな江戸の人、其人と話をする時には言葉使ひに氣を着けねばならぬといふ、其大した江戸の人はまア如何な人なのであらうか？ 早く遇ひたい者、見たい者、定めし面白い話もあらうと、自分の小さな胸の中に先づ物珍らしい心が起つて、毎日此事をのみ姉と言ひかはして、珍客の来る日を待つて居た。其中に愈前の日となると數ならぬ下女はしたまでが、「江戸のお客さま、お客さま。」と何となく浮立ツて居た。況して祖母や姉なぞは、まして自分は一日を千秋と思つて居た。

當日は自分は手習が済むと八つ半から槍の稽古に往つたが、妙な者で、氣も魂も弓には入らず唯心の中で、「もウ來たらうか？」を繰返して居た。稽古が済むと、脱兎何のそのといふ勢ひでいきなり稽古場を飛び出したが、途中で父の組下の烏山勘左衛門に出遇つた。

勘左衛門は至つてへうきんな男故、自分は甚だ好きであつて、何時も途中などで出遇ふ時には好い同行者と喜んで、冗談を言ひながら一所に歩くのが常であつた。今日も勘左衛門は自分を見ると何時もの傳で、「お坊様今お歸りですか？」と莞爾したが、自分は「うむ」と言つた許り、ふり向きもせず突ツこくる様に通り抜けたが、勘左衛門は吃驚して口を開いて、自分の背を見送つて居たかと思ふと、今でも其貌が見えるやうで。

自分は中の口から奥へ這入つて四邊の様子に氣を着けて見たが來客の様子はまだなかつた、扱はまだなかと稽古着の儘で姉の室へ往つて如何したのだらうと噂をして居た。暫くするとばた／＼といふ足音がして部屋の外から下女の聲で、

「お嬢さま、お嬢さま！ お客さまが、江戸の。」

自分はいきなり飛び出さうとした、「靜に！」姉に言はれて左様だツけと、靜に玄關の方へ往つて而してお雪といふ娘を見た。

此時娘は、叔父の後に續いて伴の女中をつれてしとやかに玄關を上ツて來た。娘は、成程、母の貰めを通り誠に美しい娘だ、脊はすらりと高く、色はくつきりと白く、目はぱつちりと清しく、眞當の美人だ。黛を施し、紅粉を用ひ、盛んに粧を凝らして後、始めて美人と見られるのは其は眞成の美人ではない、飾らず装はず天眞の儘で、其で美しいのが眞の美人だ。此時の娘の身装は旅姿の儘で、清楚とした装で飾氣の氣もなかつたが、天然の麗質は四邊を拂つて自然と人を照す許りであつた。其に如何様に容貌が美しくても、氣象が無下に卑しい時は、如何も風采のない者であるが、娘は見るから其風采の中に溫良貞淑の風を存して居て、何處となく氣高く、如何なる高貴の姫君といふとも恥かしからぬ風であつた。

其に田舎者は如何程容貌が美しくても、如何程身装が立派であつても、彼一種言ひ難き意氣といふか、しなやかといふか、風流といふか？ 彼一種たをやかな風を缺くものであるが、娘は其風をも備へて居た。清水の叔父は自分の父の弟で、祖母には第二番目の子だ、其故娘は自分と同じやうに祖母の孫で、加之も最愛の孫であつたさうな。其夜一同客座敷へ集まつて四方山の話を始めたが、何れも肉身の寄合であるから誰に遠慮といふ事もなく其話と言つては藩中の有様、江戸の話、親類知己の身の上話、又は各自の小兒の噂などで、左のみ面白い話でもないが、然し其中には肉身の情と骨肉の愛とが現はれて居て、歎息する事もあれば、口を開いて大笑をする事もあつて近頃珍らしい楽しみであつた。祖母はお雪や此處へといふ様な風に、目附で娘を傍へ招いて、種々な事を尋ねたり語つたりして居たが、其聲の中には最愛可愛といふ意味の聲が絶えず響いて居た様に思はれた。而して祖母は娘が少さかつた時の様に今も尚抱いたり、撫でたり、さすつたりしたいといふ風で、始終娘の貌を莞爾々々とも楽しさうに見て居たが、娘も今は十八の立派な娘故、流石にさうもなり兼ねたか、唯肩に手を掛けて、「ほんとに立派な娘におなりだの」と言つたのみであつた。自分は祖母が自分を愛す

る様に此娘を愛して居る様子、と自分が祖母を慕ふ様に娘が祖母を慕つて居る様子、とを見て何となく心嬉しく思つた。

其翌日の事で自分は手習から歸るや否や、「娘は如何したかな？」と見ると姉の室で召件れて來た女中と姉と三人で何やら本を見て居たが、自分を見て莞爾したので自分も其笑ひ貌に誘出されて何故ともなく莞爾した。自分は是から劍術の稽古があるから、直に稽古着を着て、稽古袴を穿いて、竹刀の先へ面小手を挟んで、肩に擔いで部屋を出たが、心で思つた、此勇しい姿、活潑といはうか雄壯といはうか、其活潑な雄壯な風と自分が稽古に精を出すのとは娘に見せてやらうと思つた。其から武者修行に出る宮本無三四の事を思ひ出しながら、姉の部屋へ這入つたが、此小さな無三四は狡猾にも姉に向つて、何食はぬ貌で、「叔父さんは？」と問ねた。姉は何とか對へて居たが自分は其様な事は聞きもせず、見ぬふりで娘の方をちらりと見て、其なり室を出て仕舞ふと後から笑ひ聲が聞えた。自分の噂だなど嬉しく思つたが、今更考へると、なんの左様でもなかつたのであらう。晩方から親類、縁者、叔父の朋友、大勢集まつて來たが、中には女客もあつた故母を初め娘も、姉も自分も其席に連つた。其中に燭臺の花を飾つて酒宴が始まると、客の求めて娘は筑紫琴を調べたが如何して、中々絲竹の道にもすぐれた者で、其爪音の面白さ、自分は無論能くは分らなかつたが、調が濟むと竝居る人達が口を極めて賞めそやした。娘は賞められて恥かしがり、此席に連つて居るのを寧ろ憂い事と思つて居るらしく、話もせず、人から物を言ひかけられると、言葉少に答をする許り、始終下を向いて居た。が其風は如何にも柔和でしとやかで、微塵非難をする處も無く、何となく奥床しいので、自分は餘念もなく其風に見とれて居た。

自分の父は武邊にも賢く又至つて嚴格な人で、夏冬共に朝はお城の六つの鐘がボンと一つ響くと、其二つ目を聞かぬ間にもウ起上ツて朝飯までは、兵書に眼をさらすと謂ふ人であつた。其故自分にも晨寢はさせず、常に武藝を勵む様にと教訓された。

自分は有難い事には父のお蔭で弓馬槍劍は勿論、武士の表道具といふ藝道は何一つ稽古に往かぬ者はなかつたが、其中で自分の最も好いた者はといふと弓で、百歩を隔てて柳葉を射たといふ養由基、又大炊殿の夜合戦に兄の兜の星を射削つて、敵軍の膽を冷させたといふ鎮西八郎の技倆、其技倆に達しようとして、自分は毎日朝飯までは裏庭へ出て捲簾を射て勵んで居た。

今日も今日とて裏庭へ出て、目指す的と捲簾を狙つて矢數幾十本かを試したので、少し疲れを覚えて來た故、暫時一息を入れて居ると冷々として心地よい朝風が汗ばんで來た貌や、體や、力の張つて來た右の腕へひやり／＼と當るのが實に心持のよい事であつた。誰でも飢ゑた時渴いた時には食物や水が甘い者であらうが、其時の朝風は實に其食物や水よりも遙に心持よく、自分は氣が清々として來た。自分は弓杖を突いて……といふのも凄じいが所謂弓杖を突いて、四邊に敵も居ないのに、立木を敵と見廻して儼然として威張つて居た。突然二つの影法師が自分の頭上を越えて目の前に現はれた、自分はふり返つて娘と姉とを見た。

娘は足を止めて、感心に御精が出来ますこと、と賞めさうな風で莞爾して清しい目を自分に注いで居た。自分は目禮をして、弓を投棄てて姉の傍へ往つた。

「大層御精が出来ますことねエ。」果して娘が賞めた。

「どうしてあなた。叱られて許り居ます、精を出しませんから。」

娘が折角賞めたものを、姉が餘計な口をさし入れた、自分は不平に思つた、然し姉は流石に姉で、情のあつた者で、弟の賞められたのが嬉しかつたと見えて、莞爾して、「それでもあなた、出來ない癖に大變に好きで。」といふのを枕に置いて自分を賞め始めた。前の言葉とは矛盾したが、其處が女の癖で、頓着は無かつた。自分が幾歳の時四書をあげて、幾歳の時五經をあげて、馬を能く乗つて、劍術が好きで、槍が如何で、弓が斯うでと、姉が自分の事を賞めたるのを、娘は笑ひながら自分の方を見詰めて、其話を聴いて居た。

が、聽終つてから、

「眞成に感心ですねエ、お少さいのに。」

此一言は心から出たので、自分は賞められて嬉しく思つた。あの黒星を射抜いて、えらいと人に賞められたよりは、此人に賞められたのを嬉しいと思つた。

「庭の方へ往つて見ませう。秀さんもお出で。」

姉と娘との間に立つて、自分は外庭の方へ廻つて往つたが、見附けた。向うの垣根の外に露を含んで、さも美しく、旭光に映じて咲いて居た卯の花を見附けた。

「お姉さま、お姉さま、江戸のお姉さま！ 御覽なさい。此花はね、私が植ゑたのですぞ、植ゑたてには枯れかゝつたけれど、やつと骨折つて育てたのです、綺麗でせう？」

「おやまあ綺麗！ 花もお好きなの？ 武藝もお好き？」

ト言つて白い手を軽く自分の肩へ掛けて、一寸揺つてそして頭を撫でたが、不思議にも、其手が觸ると自分の胸はさわぎ出した。が其を見られまいと急いで、

「花は白い方が綺麗ですねエ、赤ツばいのよりか。」

「さうですね、淡白して居て。赤いのは何故おきらひ？」

「何故ツて？ 赤いのはア平家の旗色で、白いのはア源氏ですもの、源氏の方が強いから、だから……」

愚にも附かぬ事を言ひながら、内庭と外庭の間の枝折戸の邊まで近附いた。と見ると花壇に五六本の白牡丹が今を盛りと咲いて居た。其花の下に飼猫の「コロ」が朝日を一杯背中に受けて、つくねんとうづくまつて居た。日向ぼこりをして居るのか、居睡をして居るのか？ 「牡丹花下の睡猫は心舞蝶に在」、といふ油斷のならぬ猫の空睡。此處へ花の露を慕つて翩翩と蝶が飛んで來たが、やがて翼を花に休めて、露に心を奪はれて餘念もない様子であつた。油斷を見すました大敵、然し憎氣のないへうきん者め、前足を縮めて身構をしたが、そら、飛びかゝつた。蝶は飛退いたが、周章で、狼狽

いて、地下をひらくと飛び廻つて居た。が、あはや「コロ」の爪にかゝりさうになつた。

「あらまア！ 彼様ないたづらを。」と娘は走せよつて、
「およし可哀さうに。」

娘はしなやかに身を屈めて、「コロ」を押へながら蝶を逃がした。其から「コロ」を抱きあげてそしてやさしい手でくるくると「コロ」の頭を撫でまはした。「コロ」は叱られたと思つたか、目を閉ぢ、身を縮め、首をすぼめて小さくなつた其風の可愛らしさ。娘は其身の貌を「コロ」の貌から二三寸離して、しげく見て居たが、其清しい目の中には如何様に優しい情が籠つて居たろう。「もう蟲なんかを捕るのではないよ、」と言つて、其美しい薔薇色の頬を猫の頬へ押當て、眞珠の様な美しい齒を現してゆつたりと微笑つたが、其莞爾した風は如何様にあどけなく、如何様に可愛らしい風であつたらう！ 自分は猫を羨しく思つて餘念なく見とれて居た。娘は頬の邊にまだ微笑のほのめいて居る貌を一寸ふり上げて自分の顔を見たが、其笑貌の中には、「何故其様に人の貌を見て」と尋ねる様な風が有つたので、あるひはなかつたかも知れぬが、自分はあつた様に思つたので、はつと貌を赤らめて、周章で裏庭へ逃出して仕舞つた。が恥しい様な、嬉しい様な、妙な感情が心に起つて何となく胸が騒がれた。

其日の七つ下りに自分は馬の稽古から歸つて来て、又何時もの様に娘の居る座敷へ往つて見ようと思つたが、はてまア不思議！ 恥しい様な怖い様な氣がして、往きたくもあるが往きたくもなく、如何した者かと迷ひ出して、男らしくないと癪癪を起して、其處で往くまいと決心して暫まで立てたが、扱人情は妙な者で、とんと誰か來て引張る様で、自然と自分の體が動き出して、知らぬ間に娘の居る座敷の前まで來た。唐紙は開いて居た。自分は座敷の方を向きもしなかつたが、其で居て、もう娘が自分を見たなと知つて居たので、態と用ありさうに早足で前を通り過ぎ、其隣座敷の縁側で立

止まつて、柱へつかまつて庭を見て居た。すると娘の居る座敷で誰か立上る様な音がしたが、直其音が近附いて來た。自分の胸はときめいた、注意はもう其音一つに集つて仕舞つて心は目の前に其人の像を描いて居た、其人の像はありくく目の前に見えるのに、其人は自分の背へ立つて、いたづらな、自分の頸毛を引張つて、
「秀さん、好い物をあげるから入らッしやい。」

「好い物？」好い物とは嬉しい、と思ひながら、嬉しさに殆んど夢中になり、後に續いて座敷へ這入ると紙へくるんだ物をくれた。開けて見るとあたり前の菓子で嬉しい人から貰つた物、馬鹿な事さ、何となく尊く思はれた、破さない様に、丁寧に、靜と撫でる様に紙へくるんで袂へ仕舞ふのを、娘はちつと見て居たが莞爾して、
「秀さん好い物を拵へて上げませう。」
「どうぞ。」

娘は幾枚となく半紙をとり出して、
「そら宜うございますか、是が何になるとお思ひなさる、是がね、」ゆつたりした調子で話し始めた。「——是は、そらね、是を斯う折つて、此處を斯うすると、そら、一つの鶴が出來ますよ、そら今出來ますよ、そら出來た。」

娘は鶴を折ると其から舟、香箱、菊皿、三方などを折つてくれた。自分は娘が下を向いて折物に氣を取られて居る間、其雪の様な白い頸、其艶々とした縁の黒髪、其細い、愛らしい綺麗な指、其美しい花の様な姿に見とれて、其袖のうつり香に撲たれて、何も彼も忘れて仕舞ひ、唯もううつりとして、嬉しさの餘り手を叩きたい程であつた。

「お姉さま、折方を教へて下さいな。」

其から自分は折方を習つて、二三度試して見たが出來なかつたので、娘は「眞當に此子は不器用な人だ。」と笑ひながら、いやといふ程自分の手を打つた、痛かつた、痛さが手の筋へ染み渡つた、が痛さと一所に嬉しさも身に染み渡つた、嬉しいから痛いのか、痛い

から嬉しいのか？ 恐らく痛いから嬉しいので……まあ如何でも宜いとして、痛さが消えぬ様に打たれた處を靜と撫でた。

此處へ姉が這入ツて来て、

「秀さん何をしてお在でだ。」

娘は莞爾して姉に向ひ、

「如何も此子は不器用で不可ません。」

「此様な者は出来なくツてもいゝや。」

「出来なくツてよければ、何故教へてくれと言ひました？ 我儘子め！」

娘は口元で笑ひながら顔越に睨む眞似をした。自分は我儘子と言はれるのよりは、何とか外の名を附けて貰ひたかつた。

其夜の事で、まだ暮れてから間もない頃自分は何の氣もなしに、

祖母の室へ遊びに往ツた。すると祖母を初めとして兩親も居れば叔父も娘も居て何か話して居たが、自分を見ると父が眉に皺を寄せて、「彼方へ往ツてお在で。子供の聞く様な話ではない。」と儼然として言ツた。が自分は此場の様子を怪んで、物珍らしい心から出るのを少し躊躇して居ると、娘が貌をふり上げて清しい目で自分を見た、其目の中には、「早く出て往ツて……」といふ様な風があつた。

一寸見た娘の目は儼然として言はれた父の嚴命より剛勢だ、自分は娘の意に従ひ直に室を出たが、其でも今室へ這入ツた時ちりと皆の風が目止つた。父は叔父に向ツて「左様さ、若年にしては中々感心な人で。」などと話して居た。又娘は下を向いて膝を撫でて居ると、祖母と母とが左右から其貌を覗き込んで、何をか小聲でたづねて居た。自分は室を出てから、何を皆は話して居るのか、何故又自分が居てはわるいのか？ と思ツたが、なアに、思込んだのではない、ほんの目の前を横ぎる煙草の煙、瞬を一つしたら直ぐ消えて仕舞ツた。

元來此日は、自分は何となく嬉しくいそ／＼として居た。然し何故嬉しかつたのか其理は知らなかつた、が何がなしに嬉しかつたの

で臥床へ這入ツてからも何となく眠るのが厭で、何となく待たるゝ者がある様な氣がするので、其辭其待たるゝ者はと質されるとな、何もないので、何も無いと知ツて居るが、其處が妙な譯で、夢現の間で體有る様に思ツて居るので、如何も臥るのが厭であつた。其故床の上に坐ツて居ると、そら、娘の姿がちら／＼目の前に現はれて來た。莞爾と笑ひながら自分の手を打ツた時の貌、其目元、口元で笑ひながら顔越に睨んだ貌、其りきんだ目付、まあ何よりも其美しい姿、容が目の前にちら／＼し始めた。自分は思ひ出し笑ひをしなから、息も靜にして、其姿が逃げて往かぬ様と、荒く身動きもせず、そろ／＼夜具の中へもぐり込んで、晝間打たれた手の處を靜と頬の下へ當がツて、其儘横になツたが、何時眠ツたか其も知らず心地よく眠入ツて仕舞ツた。

自分は此時からといふ者は娘の貌を見て居る間、其聲を聞いて居る間、誠に嬉しく又楽しく、ついうから／＼と夢の間に時を過して居た。斯うは謂ふものの娘が居ないとして、夢聊ふさぐなぞと謂ふ事はなかつた。何を言ツても自分はまだ十四の少年、自分と娘とは年が如何程違ツて居て、娘は自分より幾歳の姉で、自分は娘の前では小兒であるといふ事、又娘は只一時の逗留客で日ならず此土地を去る人といふ事、自分は娘を愛して居るのか、將亦娘は自分を愛して居ないのかといふ事、總て是等の事は露程も考へず、唯現在の喜びに氣を取られて、其を楽しい事に思ツて居た、が其喜びは煙の如く、霧の如く、霞の如くに思はれたので、如何かすると悲しくなツて来て、時々泣出した事もあつたが、なに、其だとして暫時の間で、直又飛んだり躍ねたりして、夜も相變らずよく眠ツた。

叔父は僅に一週の休暇を賜はツて來たので、一週の時日はほんの夢の間の様であつた。もう明日一日となツて、自分は娘にも別れなければならぬかと、何となく名残惜しく思ツたが、幸ひ叔父が三日の追願ひをしたので、尙二三日は此方に滞留して居る事となツた。然るに其夜の事で母と祖母との間に誠に嬉しい話が始まつた、其を

何かといふと斯うで、もウ二三日過ぎると叔父も江戸へ歸るに因り、何か江戸土産になりさうな、珍らしい面白い遊戯を娘にさせて歸したい、が何が宜からうと二人が相談を始めた。然し面白い遊戯と言つた所が此草深い田舎では、五節句、七夕、天王祭でなくば茸狩、蕨探、まア此様な者で、其を除いては別段是ぞといふ遊もない、けれども今は四月二十日、節句でもなければ祭でもない、遊戯と言つては蕨探のみだ、蕨探と言つた所が左のみ面白い遊戯でもない、が摺鉢の様な小天地で育つて居る見聞の狭い田舎の小兒には、其が大した遊戯なので、又江戸の様な繁華な都に住んで居て野山を珍らしく思ふ人には矢張面白い遊戯なので、其故愈蕨探に行くことに極り、其事を知らせた時には一同歡喜の聲を上げた。

擧其夜は明日を樂みに各臥床に這入ツたが、夏の初として夜の短さ、間もなく東が白んで夜が明けた。

其日の四つ頃やうくに支度が出来て、城下を去ること半里許りの長井戸の森をさして出掛けた。同勢は母と、姉と、娘と、自分と、女中二人に下部一人、都合七人であつた所へ、例の勘左衛門が來合せて、私もお伴をと加はつたので、合せて八人となり、賑やかになつて出掛けた。

家敷の郭を出て城下の町を離れると、俗に千間土堤といふ堤へ出たが、此堤は夏刀根川の水が溢れ出る時、其をくひ止めて萬頃の田圃の防ぎとなり、幾千軒の農家の命と頼む堤であるから、随分大きな者である、堤の上許りでも廣い處は其幅十間から有る、上から下へ下りるには一町餘も歩かねば平地にはならぬ、まア随分大きな堤だ。堤の兩側は平一面の草原で、其草の青々とした間からすみれ、蒲公英、蓮華草などの花が春風にほら／＼と首をふつて居ると、其を面白がってやら、蝶が翩翩と飛んで居る。右手は唯もウ田畑許り、此方の方には小豆の葉の青い間から白い花が、ちら／＼人を招いて居ると、彼方には麥畑の蒼蒼が風に波立って居る處で、鳴子を馬鹿にした群雀が案山子の周圍を飛び廻つて、辛苦の粒々を掘つて

居る。遠くには森がちらほら散つて見えるが、其陰から農家の屋根が靜に野良を眺めて居る。蛇の様な畑中の小徑、里人の往來、小車のつづくの、田草を採る村の娘、稗を蒔く男、釣をする老翁、犬を打つ童、左に流れる刀根川の水、前に聳える筑波山、北に盆石の如く見える妙義山、隣に重つて見える榛名、日光、是等は總て畫中の景色だ。鄙の珍らしい娘の目には流石に此景色が面白いと見え、度々／＼好い景色と賞めた。

途中で出遇つた人も稀であつた。初め出遇つたのが百姓で、重さうな荷をえつちらおつちら背負つて居たが、態々頻冠を取つて會釋して往過ぎた。次に出遇つたのが村の娘で、土堤の桑の葉を摘みに來たのか、桑の葉の充滿つた目籠を各自小脇に抱へて居たが、我々を見るとこそ／＼土堤の端の方へ寄つて、立止まつて、「彼は何處様の嬢様だが、何處さアへ往かつせるか、」などと噂をして居た。其次に見掛けたのが農家の小兒で、土堤で餘念なく何やら摘んで居たが、其中一人が何か一言言つたのを合圖に、眞暗三寶驅出した、其から土手の半腹まで往き、遙に此方をふり向いたが、上から勘左衛門が手招をしたら、又わい／＼と言つて一目散に驅下りて仕舞つた。

勘左衛門の來たのは我々の興を増す種であつた。此男が歩きながら始終滑稽を言つて居たので、途中は少しも退屈せず何時の間にか境驛の此方の渡場まで來た。渡守は我々の姿を見るといきなり小屋から飛び出して、二つ三つ叩頭をしてそして舟を出した。

此處は川幅は六七町もあらうか、是から上になると十四五町もあらう、大刀根、小刀根、と分れる處で其幅最も廣い處だ。娘は姉に向つて言ふには、「此頃江戸で名の高い馬琴といふ作者の書いた八大傳といふ本を讀みました、其本に出る人で……」と彼犬飼大塚の兩犬士が芳流園上より轉び落ちて、つひ行徳へ流れついた事を話して、其犬士の流された處も此處等であらうかなどと話して居る中、船は向うの岸へ着いた。其から上陸して境驛の入際から直横へ

切れると、森の中の小徑へ掛つた。兩側には杉、檜、樅などの類が行列を作つて生えて居るが、上から枝が蓋さつて居て下に木下闇が出来て居る、其小徑へ掛つた。

「もウ直其處から這入るのです。さア皆さん探りツこをしませう。」と勘左衛門が勇み立つた。尤も熊と、

「秀さん宜うございますか、」娘は笑ひながら——「まけませんよ。」「えゝ、宜うございますとも。負けるもンか女なんぞに。」

長井戸の森は何里位續いて居たか、自分はよく覺えて居らぬが、随分大きな森であつた。惣森の中の小徑を凡そ二三町も這入つて往くと、葉守の神だか山の神だかえたいの分らぬ小さな神の祠の前へ出た、是が森の入口なので。森の中へ這入つて見ると、小草の二三寸延びた蔭又は蚊帳草の間などから、たをやめの書いた假名文字ののしといふ恰好で、蕨が半身を現はして居た。我々は是を見ると、そら其處にも！ おゝ大層に！ ほら此處にも！ なんとまア！ などと頻りに叫びながら小躍りをして探始めた。初の中は皆一處で探つて居たが、忽ち四五間七八間と離れ離れになつて探始めた。而して一本の蕨を二人が一度に見附けた時などは、騒ぎであつた。

「あれ私が見附けたのだワ！」

「あらまア！ お嬢様。おずるい。是は私が見附けました。」

「お雪さま、清にお負けなさいますな。」

左様かと思ふと彼方の方では「おや何處へ往つたらう？」「此方、此方！」などと手を叩いて居た。又蕨に氣をとられて夢中で居ると、突然足下から雉子が飛出したのに驚かされたり、其驚かされたのが興となつて、一同笑聲に入つたりして時のうつツたものも知らず、愈奥深く這入つて往つた。不意に人聲が聞え出した。何處から聞えるのか？ 方々を見廻すと、遙か向うの木の間から煙が細く、とんと蛇の様に立昇つて居た。

我々は行くともなく、進むともなく、煙の立つ方へ近づいた。すると木の間から三人の人影が見えた。二人の男は紺の脚絆に切緒の

草鞋といふ嚴重な足ごしらへで、白襟花色地の法被を着て居た、向う向きの男は後からでよく分らなかつたが、打割羽織を着て居て、加之其下から大刀の鞘と小刀の小尻とが見えて居た様子といひ、一壇高き切株へどツかと腰を打掛けて、屋臺店の蟹と跋扈かつて居た爲體といひ、如何様此中の頭領と見えた。

我々の近づくのに氣が着いたか、件の男は此方をふり向いた。見覺えの貌だ、よく見れば山奉行の森といふ人で、残の二人は山方中間であつた。

山奉行といふのは、年中腰辨當で山林へ出張して、山林一切の事を管轄する役で、身柄のよい人の勤むる役ではない、其故自分等に對しても、自然丁寧なので。

森は自分を見ると、満面に笑傾けて而して立上つて、

「おや、秀さん、蕨探ですか？ 大層大勢で。探れますかな？ だら／＼お見せなさい。」

其中に一同も近づいて來た。森は二歩三步前へ進み、母を初め姉や娘に向つて、慇懃に挨拶をして、其から平蜘蛛の如く叩頭をして居る勘左衛門に向ひ、

「今日はお伴かな、御苦勞だの、」と言つて、其から又下女の方へ向いた、が物は言はず、唯挨拶に笑貌を見せて、直又母の方へ向き、「如何でござりまする、ちと小屋へ入らして御休息をなすつては、はい／＼いや誠に汚穢くるしい處で……が……淹茶でも獻じませう。こりや八助、何かを取揃へて持つて參れ、身共は小屋へ參るから。さ御案内致しませう。」

時刻は八つ頃でもあつたか、此邊は一面の杉林で、梢の枝は繁りに繁つて日の目を蔽す許り、時々氣まぐれな鳩が膨聲で啼いて居るが、其聲が木精に響いて、と言ふのも凄じいが、四邊の樹木に響き渡る様子、とんと山奥へでも往つた様で、なんとなく物寂しい。林中の立木を柱に取つて、板屋根をさしかけたはつたて小屋、是は山方の人達が俄雨に出遇つた時、身をかくす通場所、正面には疊が

四五疊、但したといふものない程の汚らしい者、其から前が土間になつて居て、真中に爐が切つてあらうといふ書割。

母と、森と、勘左衛門の三人が三鐵輪に座を構へて、浮世雜談の序を開くと、其向うでは類は友の中間同志が一塊となつて話を始めた。其處で自分は少し離れて、女中連の中へ這入込み、此方の方へ陣取つた。

「秀さん。」娘は笑ひながら、「和子如何位探りました、お見せなさい。おや儀其切、少ないことねエ、私の方が多うございますよ、そウら御覽なさい、勝ちましたよ私の方が。」

自分は此時姉が其身の探つたのを娘のと一所にした所を見た。

「あゝ、ずるいゝ、家の姉さんのを混ぜたのなもの。」

「あら、あんなこと。ほゝゝゝ、混ぜはしませんよ。」

「いゝえ、混ぜました、混ぜましたよ、見て居ましたからね。」

「あら。まア、卑怯な、男らしくもない、負けたものだから其様な事を。」

其中に濃茶が這入ると、兼て中間に持たせて來た餅を今日の晝食として、尙四方山の話をして居た。

其時勘左衛門の話に、此へうきん者が檢見の件をして、村々を廻つて、或村で休んだ時、脚絆の紐を締直すとして、馬鹿な事さ、縁臺の足ぐるみ其紐を結び付けて、而して知らずにすまじきつて、茶を飲んで居たが、其中上役の者が、いざ、お立ちとなつたので、勘左衛門も急に立上つて足を舉げると、不可、舉げる拍子に縁臺が傾いたので、盆を轉覆して茶碗を破したが、未だに其が一つ話でと、自身を物語つたのを、我々一同話を止めて、可笑しな話と聞いて居たが、實に此男は滑稽家でもあつたが、又そゝくさした男でも有つた。

扱暫く此處に休んで居たが、自分達の組が大人を催促して、山奉行に別れて、再び蔵探に出掛けた。今度は出掛けるや否や、直ちりぢりになつて探始めた。自分は娘の傍を離れず、娘が探る度に自分

の探つたのと比較して見て、負けまいと思つて勵んで居たが、此時はもう蔵に氣を探られて、娘の事は思つては居なかつた、ト言つて忘れても居なかつたので、娘の傍に居るといふ事は、暗に知つて居たので、所謂蟲が知つて居たので、——其飄るふりの袂、其蹴返す衣の襷、其たをやかな姿、其美しい貌、其やさしい聲が目に入り耳に聞えるので、——其人の傍に居ると何處か幽に感じて居たので、其故一層樂しかつた。不意に自分は向うの薄暗い木の下に非常に生えて居る處を見つけた。嬉しさの餘り、聲を上げながら駆け寄つて、手ばかり探らうとすると、娘も走れて來て探らうとするから、探つては不可と娘をさへて、自分一人で探らうとした、が不可かつた、自分は今まで探溜めたのを風呂敷へ入れて提げて居たが、其を今すつかり忘れて、其風呂敷を手離して、娘と手柄を爭つたので、風呂敷の中から探つたのが溢れて、四方に散るといふ大失敗、周章で拾集める中に、娘は笑ひながら、一つも残さず探つて仕舞つた。自分が見附けたのを横取するのは非道い、返して下さとい、と爭つて見たが、娘は情強く笑つて居て、返しさうもないから、自分は口惜くなり、ヤツきとなり、目を皿の様に、澤山ある處と見廻した、運よく又見つけた、向うの叢陰に、が連わるく娘も見つけた。や負けた、娘が先へ走り寄つた。唐突に娘があれエと叫んだ、自分は思はず吃驚した、見れば、もう自分の傍に居た、眞青になつて、胸を波立たせて、向うの叢を一心に見て。自分は娘の見て居る處、其叢を見ると、草がざわゝと波立つて、大きな青大將がのそゝと這つて往つた、暫くして娘はほつと溜息を吐いて、あゝ怖かつた、と莞爾して而して四邊を見廻して、又おやと言つた。先の驚きがまだ貌から消えぬ中に新しい驚きが其心を騒がしたので、以心傳心娘の驚きが直自分の胸にも移つた。見れば四方に誰も居ない。母を呼び又姉を呼んで見たが、答ふる者は木精の響き、梢の鳥、唯寂然として音もしない。

「何處へ皆さんは往きましたらう。」心配さうな聲で、「ついうツか